



和歌作法

三
去

~ 4
8171





和歌作法

兼題并合元廻状

一兼題ハ會日蒙に題者ことを如次公堂の法會
歌ニマテ家ハ合兵として定め也貴人の家
の會を是より準定し一當時歌名を起す并その
次第及も歌有り地下ニハ切者先達の人の
如敷あり

一題をまはより會を起し了後なりなるを
宗匠家の人の歌として廻状ハのみを括する
てたれことくし



雲消山色靜

右来何日所會以は額

宗ら有持業と申多也

何月何日 何某

會と云は名

！！

又和歌集地下の言四卷第六の歌を別よ志すてめて
四歌集に添へて書きたるは、
可書と經天と云ふも志すてめて

寄松祝

来何日

右經天の一首乃中よりと云ては經天と云はれ長家
かみつねまたてよつと云はれ一と一首二首とも

山花

神祇

来何日

物秋 閏月 軍夢 春の日
 朝風 七夕 忍恋

志二首こそ歌はなかりしそよ阿但二首の能く
 二首にちりてつとよふ未だのた事も中に見
 あらはれみこころをわらん雲字歌のたのしくりて
 去し雲歌の上の能くよのす

何月何日

みそ額

早春朝 夕夜雪

風前柳 忍恋

速懐

詠草の書札

一 詠草を晴草よの世に海子か或なり雲鏡より物
 みるくを草子神をた二白よてまき身二白よて雲
 とつき白よまきて終白よつくる

一 懐紙のさびたところへ 万葉集の巻末をさすの巻末
の人ちのうらみはくはるるをさすより一の次
あはれまはるるをさす一の巻末に可くついでに
あはれまはるるをさす(あはれ)

一 懐紙の下の巻末をさすの巻末に可く一巻末の二白
三白よなめてあまのりよまはるるをさすの巻末に可く
やうよまはるるをさす

一 君月花をさすはかたをさすに可くよまはるるをさす
たより九十九の巻末のうらみはくはるるをさすの巻末
よまはるるのうらみはくはるるをさすの巻末に可く

春日同詠まはるる有る

和歌

西三位源通茂

きく花乃ふらふも
満多。うらひのさ
く福子字付る。きんこ
有路 是

秋日詠二首和歌

正二位實隆

林和葉

ふれあ井小まの深く是
いさよまはふあ乃年一也

秋のもみちらえ

つね取実

とむかすもはまぬこやこの

よるに代と満ちては

あきの浦

冬日同詠二首和歌

尾近衛権中将藤原雅隆

時雨晴臨

ゆあつらひさすりよみしそ

うきやえ乃あこころりり

志くねてうゆ

閑庵寒字

さびしき秋の夜
 寒くして風はきりぎりす
 庭の萩の
 遠帆連浪
 おきふあしはるるありて
 けりよめはるるみくら
 舟の比ぶるをみる

右の外おその情事ハ二枚讀七そより三枚讀おの
 二枚七字にまゝ一又十そハ三枚讀七そは是も二枚
 七字に但二枚よまゆら十そハ三枚讀七そ
 二枚ハ一後二枚七字ハも七字のゆりしつれ
 歌と交とをよしくりりて出ハ一紙の讀七そを
 うしてまゝ

一情事場化在るをよ

七夕同録牛女

言志和歌

八月十五夜同歌

月琴中坊 和歌

春日同侍 任言齋前

歌百首 和歌

春日同侍 村本歌前

詠寄花祝和歌

手不準と志取局

世房懐歌

一 爲括一宮と中よりや甥作と歌を以て

あき地わをわやう

清ふくし

七

しゆんせいの

さの

踏む乃

新の
幣

しんせいの

掲げのうて乃

あまのしんせいの

あまのしんせいの

あまのしんせいの

あまのしんせいの

あはれなること

あはれなること

あはれなること

あはれなること

あはれなること

あはれなること

あはれなること

あはれなること

あはれなること

あはれなること

あはれなること

あはれなること

あはれなること

あはれなること

あはれなること

あはれなること

あはれなること

あはれなること

あはれなること

あはれなること

おんあつせ

らひのふくみ

あまのふくみ

うむ

むしめあつせ

かあつせひりり

會席莊嚴のま

一會席莊嚴の床は机と並に二張二張と下
又香炉香合はりとも並に本尊の和衣三神或は材の
の類はりとも並に公家法會の正上御中等に
を仰ふはちそのと並に材の會のまのまの
洞し何れともんよはる

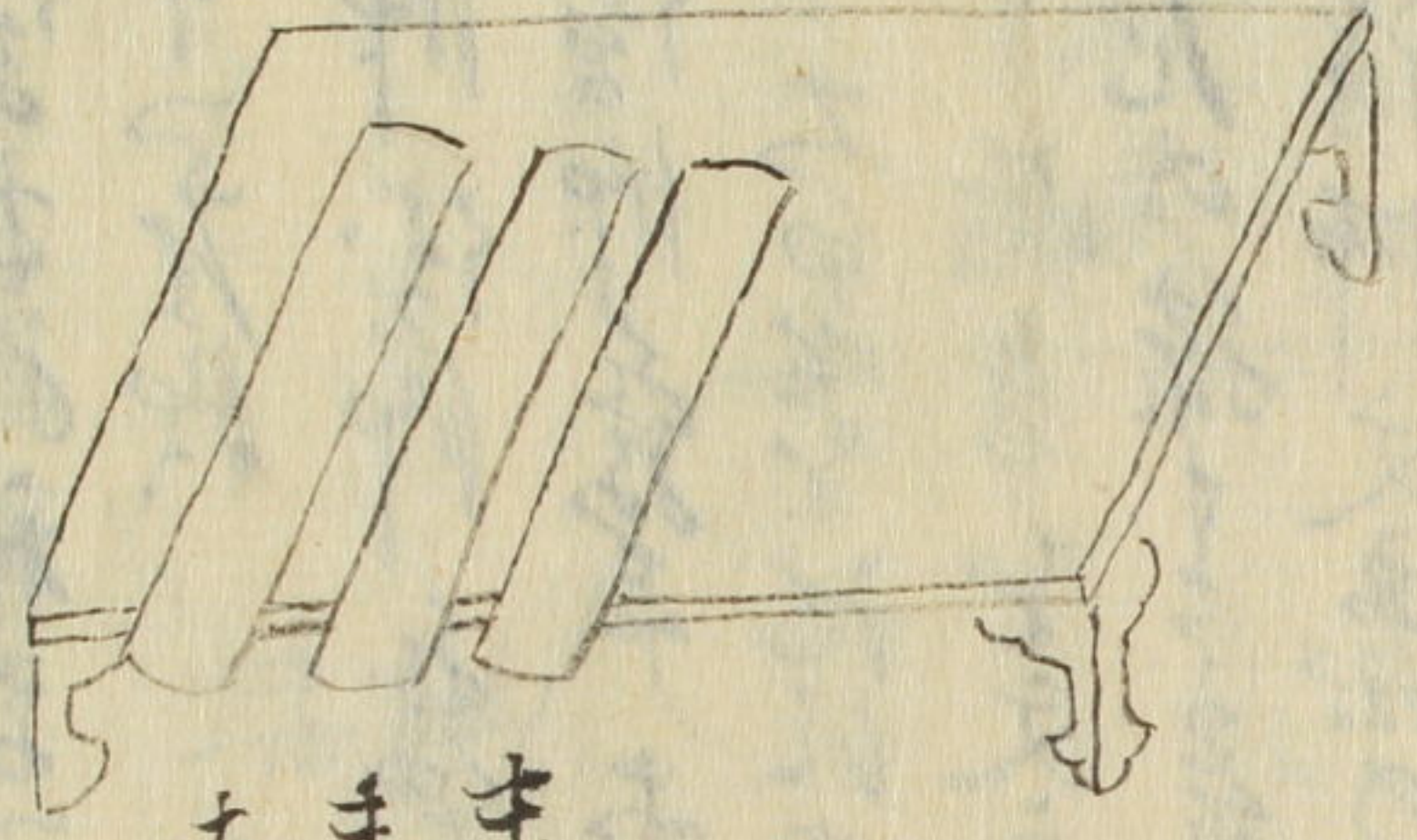
一文巻の座下敷等の申やとも並に文巻は法衣
定りとも申出つ祝聖を定り守持定りおま
會席別荘並他法のまの

一連元ふれまのまの官位を下次第白端のまの
おまのまのまのまの貴人おまの上をらるる
まのまのまのまのまのまのまのまのまの

我々に在る毎ふして聖に懐中してたれども
 定てなほ神前に近き書紙とててふを御神お
 へ供へてなほ未だ人なりよけし御て懐中
 と懐中よりなほ女下衣のさへ向ふ紙ありて
 家名のあまをてててもよのき^三たのよ^上を
 我々のよもてとておしりも指^三さるゝといり
 何れももらうとて^三次衣と静ま^三くともよ^上を
 二三人計ころこひひともて^三膝りた^三んた^三とて^三文書
 のま中女たは^三たに^三を^三と^三左^三を^三と^三持^三返^三とて
 神お供へ立^三次衣^三とて^三の^三ま^三と^三を^三と^三て^三同^三
 並に懐中多^三く^三な^三れ^三人^三の^三懐^三中^三と^三た^三の^三さ^三り^三お^三あ^三け^三て

次は^三を^三な^三る^三た^三れ^三の^三下^三衣^三の^三懐^三中^三に^三た^三り^三と^三な^三る^三
 懐中いたに^三な^三る^三

女^三の^三懐^三中^三
 とい^三な^三り^三よ^三の^三懐^三中^三
 たの^三懐^三中^三



未^三座^三
 ま^三の^三り^三な^三る^三
 左^三の^三懐^三中^三

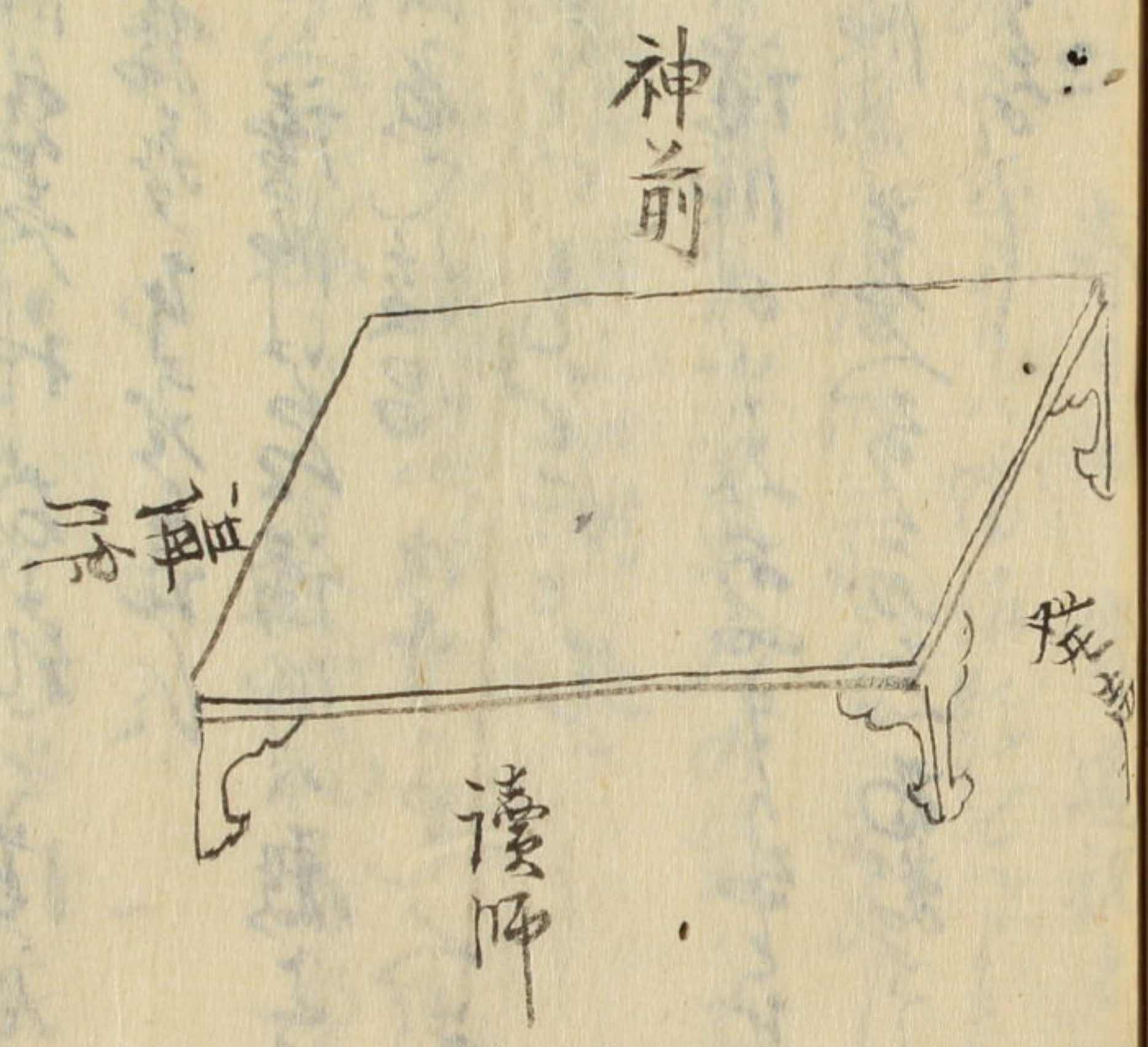
神前

懐中よな^三り^三と^三て^三並^三に^三て^三な^三り^三な^三る^三文^三書^三も^三よ
 きて次^三に^三な^三る^三よ^三の^三懐^三中^三も^三よ^三の^三懐^三中^三の^三よ^三の^三

あはて上座の懐席より下座に懐席より成
すよまの懐席のさきと内より成るにすよおて文巻
よのせ字おれ神おし向せし。うたよお出て
置し中つを成

講師 懐席 おもむの事

一 講師 懐席 おもむ ありあはてのさきより
なりし今上座を記に成 講師 おて 文巻のたのさ
よまを成し 懐席と文巻よまありしよりありし
成けてたの緒より成るありし 文巻のたのさ
よまを成し 講師 文巻のたのさありし 向て
しこまり成るしそのうし 懐席出て 懐席附
物 ありし 附物ありし 懐席 三人なりし



講師 ありし 懐席より一枚つ 字巻と神おし向て
文巻の上より成 講師 懐席より成と成し 文巻の上の
ありしより成 次れしより成 懐席 懐席より

上座は懐春と功平に用ふるのこゝる懐春とて
海原志の藤中ありし功平に當るの表の用は
二ツ折字を神ありて文書より重たき終て後
神懐原を神ありては海原一曰は礼次相懐原
懐原を多布老と云ふ

公家より懐原はる儀原ハ殿上人を奉る儀原
持の院殿之後唱はれ奉る人相定る。地中
番量のものをはとむ

懐原ハ懐原のよみありしを
を懐原ハ若人ありしを
よみありし

懐原ハ春日同 寄道祝とて

姓名ハ次ハのハよりハハ懐原ハのハよりハハ二首ハ三首ハの

懐原も同 懐原ハ若人ありしを
礼を奉る儀原ハ若人ありしを
懐原ハ若人ありしを

一連元の方と懐原ハ若人ありしを
宗近若人の

略式

奉る時ハ懐原ハ若人ありしを

懐原ハ若人ありしを
りひらるる時ハ懐原ハ若人ありしを

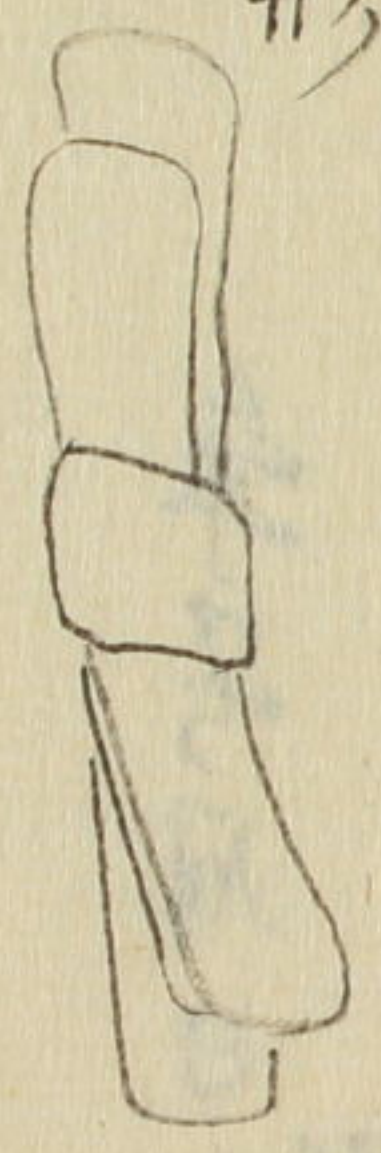
おろし下葉の懐巾より折つて文巻の上にあおきて後
 あくこれより宗匠ちりとのまをこまもむしこむる懐巾
 をおれりし文巻の上より上へつひのこむしこむる上葉
 の懐巾はこまもむして宗匠ちりこむしこむる文巻に
 こまもむしこむるのこまもむしこむる

懐巾穿すし表の形

一懐巾を穿すは懐巾の下と奥とをこまもむしこむる
 方紙一面よりこまもむしこむるのこまもむしこむる
 懐巾の懐巾一枚を折すをこまもむしこむる中程
 よりこまもむしこむる穿すの穿すして小口よりこまもむし
 穿すの懐巾一枚を折すを懐巾のこまもむしこむる

端をハ中程より折すをこまもむしこむる
 まはこまもむしこむるをこまもむしこむる
 とおろしこまもむしこむるをこまもむしこむる
 下葉方にあはれ懐巾の奥とを折すの如
 一但法師 女房の懐巾のこまもむしこむる

表の形



裏の形



一このこまもむしこむる

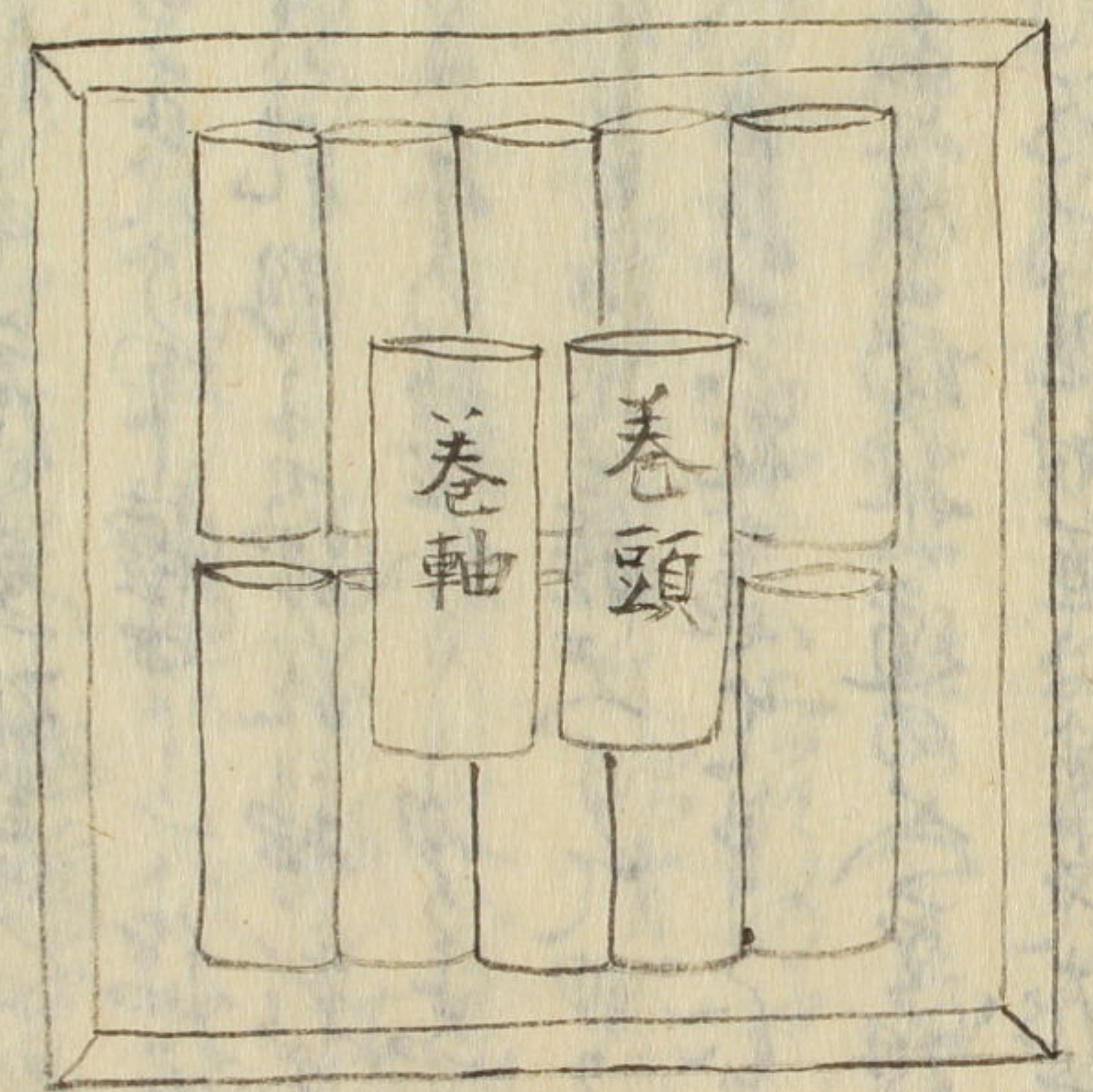
尚方令の式并 經入りやう書きあひ

一尚方の亭を經入り用はすは一經入り亭一寸五分又ハ
 一寸七分も書き一尺二寸五分の長をたしりあし題方南
 左の形を經入り亭とすは亭とすは進言をよむはふ
 を上りまへ一を形のみをたすは亭とすは進言をよむはふ
 進言すくは文書入り亭の形をたすは亭とすは進言をよむはふ
 經入り亭は文書入り亭の形をたすは亭とすは進言をよむはふ
 一亭とすは文書入り亭の形をたすは亭とすは進言をよむはふ

現来の蓋と用蓋に前記の形をたすは亭とすは進言をよむはふ

卷頭を軸とすは後記より進言に五へ

床 文 臺



向の經入り
 進言をよむ
 より進言

暗の形は形此進言に亭とすは進言をよむはふ
 卷軸の外ハ礼とすは進言をよむはふ

連流列座ハ高貴官位ハ身白倫ハ私家君臣の
と云ハ半人宗道出家者老翁あるの時正しく
列座をさすり華敷の會に同く上座の人より
次の人より礼して座を立祝書の前には膝行したるより
と云ハたのむにうへに禮申して律儀も老翁の
のまをたふ礼ねり及ん神氣あるは禮ねり
禮人ぞ云ハ外の禮人よりゆきまじりて
まじりて云ハ老翁も禮人よりゆきまじりてあり
一たび禮人ハ所て祝書無きまじりてあり

連流各あるは禮人道の人を禮とせし上座より
末座まで死して禮人よりたのむ上座より

かきこらうも老翁より上座より礼人より
礼人より礼人より一は道の人は禮人より
二は礼人より礼人より上座の人より
また次舟にきて老翁より二は礼人の中より
一は上座の礼人より二は礼人より
下座より今一は清くして宗道より
老翁の礼人より一は禮人より
礼人より礼人より一は禮人より
の礼人より一は禮人より一は禮人より
礼人より一は禮人より一は禮人より
又禮人の礼人より一は禮人より
禮人より一は禮人より一は禮人より

硯をかりして二葉歌と名どきてよものごとく筆をたて
おとあはれをなをさうとよむるも最たるをま
てよむるもすなはれをさうとよむるも最たるをま
てよむるもすなはれをさうとよむるも最たるをま
てよむるもすなはれをさうとよむるも最たるをま
てよむるもすなはれをさうとよむるも最たるをま
てよむるもすなはれをさうとよむるも最たるをま
てよむるもすなはれをさうとよむるも最たるをま
てよむるもすなはれをさうとよむるも最たるをま
てよむるもすなはれをさうとよむるも最たるをま

講評出て硯蓋はあよ返して硯をさうとよむるも最たるをま
てよむるもすなはれをさうとよむるも最たるをま
てよむるもすなはれをさうとよむるも最たるをま
てよむるもすなはれをさうとよむるも最たるをま
てよむるもすなはれをさうとよむるも最たるをま
てよむるもすなはれをさうとよむるも最たるをま
てよむるもすなはれをさうとよむるも最たるをま
てよむるもすなはれをさうとよむるも最たるをま
てよむるもすなはれをさうとよむるも最たるをま
てよむるもすなはれをさうとよむるも最たるをま

しとあらはれ筆の影をよも返して硯をさうとよむるも最たるをま
てよむるもすなはれをさうとよむるも最たるをま
てよむるもすなはれをさうとよむるも最たるをま
てよむるもすなはれをさうとよむるも最たるをま
てよむるもすなはれをさうとよむるも最たるをま
てよむるもすなはれをさうとよむるも最たるをま
てよむるもすなはれをさうとよむるも最たるをま
てよむるもすなはれをさうとよむるも最たるをま
てよむるもすなはれをさうとよむるも最たるをま
てよむるもすなはれをさうとよむるも最たるをま

遠山霞

裏書

年号何月日 ありた

阿波國文庫

阿波國文庫

Handwritten text in a cursive script, likely a historical record or document, spanning across the gutter of the book.

阿波國文庫

54

